美女に勝てない善人

裏表ユイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
美女に勝てない善人

【Ｎコード】
Ｎ１４３９ＢＡ

【作者名】
裏表ユイ

【あらすじ】
高校生になった平凡・不憫・ツッコミ属性の前田　善。教室に入ると、目の前には美少女が。その美少女は、中学二年の終わりに善を助けてくれた…
善が一目惚れした少女だった。善は、入学して一週間もたたない内に、美少女に告白した。しかし、その少女の本性は…ドＳだった…。他人の前では猫被りのドＳ美少女。人が善い為か美少女にこき使われる主人公。「ｗｗｗ」しか言わないへのへのもへじのお面をつけている主人公の幼馴染。

今日も善は、二人を抑えられるのか！？

「何でこんな目に遭うんだろう…（泣）」ｂｙ主人公

最初ノ葉　マ　エ　ガ　キ　by作者（前書き）

これは、一種のプロローグみたいなものです。
本文は始まっていません。タイトルの通りの章です。

後に関わって来る（というより、最後の最後にしかないかもしれない）ので、
読んでも読まなくてもどちらでも結構です。

それでわ、どうぞ←

最初ノ葉　マ　エ　ガ　キ　by作者

僕は、作家だ。名前は…あるけどここでは教えられない。
作家になってお話を書くのは、小さいころからの夢だった。
いや…正確に言うと、このお話を書こうと思ったのは、大学生。
僕の…大切な大切な三年間の思い出。それを残したかった…。
この思い出を、僕が忘れないために。
仲間が、忘れても思い出せるように。
そして…僕の、いや、僕らの軌跡を残すために…

「何…してるの？」

僕の妻が来たようだ。

「僕らが出会った…あの三年間を残そうと思って」
「ああ…懐かしいな…」

そういって微笑む妻。美人なだけに、絵になっている。

これは…僕たちだけの…物語。

最初ノ葉　マ　エ　ガ　キ　ｂｙ作者（後書き）

短いですか？
初めて書いたのと、最後の複線ということで、勘弁してください。

名乗り遅れました。自分、新人の裏表ユイと申します。
以後、宜しくお願いします。

再度いいますが、この複線は、本当に最後の最後にしかないかもしれません。
なので、スルーしてくださって結構です。

がんばりますので、宜しくお願いします。

零ノ葉　登場人物（前書き）

登場人物の所で詳しく説明したい所があったので、ついでに作ってみました。
一部ストーリーにも関わります。
ちなみに、身長はなんとか考えましたが、体重はよくわからなかったので書いていません（どのくらいが細身とか。身長は、テレビのおかげでなんとか）
あと、どうしてこのキャラができたのか…など、少しずつ書いていくので、
チェックしてみてください。

それでわ←

零ノ葉　登場人物

登場人物

名前　前田（まえだ）　善（ぜん）　性別　男　年齢　１５歳　身長　１７６ｃｍ

詳細

・髪の毛は黒い・髪の毛が一本だけ横にはねている（いわゆるアホ毛）・童顔（本人は気づかない）

・不憫、平凡、ツッコミ役の可哀想主人公の要素を兼ね備えている・少々毒舌気味・鈍感

・家族は、母、父、兄、妹の五人家族・一人称は僕・足が速い・五味の言葉を翻訳できる

・実は母が女優、父が大物司会者、兄が俳優、妹がアイドルのすごい家族

・本人が純情すぎるため、悪意に敏感・悪意の篭った裏の声だけ分かる

この物語の主人公。自分、不憫系主人公が大好きなのでこんな感じに。

善が出来たのは、蒼が最近うごめもの「棒人間」にはまっているというので、自分も書いてみたくなりまして、男の子がリボンつけた女の子に「付き合ってください！」みたいな感じに手を出しているのを書いたんです。それを見た蒼が、棒人間に目をつけ、これが意外と面白かったことからできました。

名前は、前に進まないの「前」と、不憫だけどいい人にしようよ思い善人の「善」で、前田　善です。

名前　女美（じょみ）　優子（ゆうこ）　性別　女　年齢　１６歳　身長　１６５ｃｍ

詳細
・髪の毛は明るい茶髪・ポニーテール・縛ってあるリボンは蝶々結び・髪の毛が縛っていると腰まで
・認めた人と知っている人以外は猫被り状態・釣り目・猫被りでは少々強きの優しい目
・一人称は俺、猫被りでは私・家族は、母、父、弟の四人家族・猫被り中に、素が出るときがある

この物語のヒロイン。実はもうちょっとあるんだけど、それはネタに使うので書いてありません。
また、弟関連ネタとかいろいろあるんですが、それもまだ秘密ということで。
ネタをバラシタ時に追加していきます。
あと、女美さんは、善の説明にあるリボンをつけた女の子です。蒼がおもしろがって、善の告白を断るときに「はぁ！？」というヤクザ系の顔を書いたので、そこからいろいろと膨らましてできました。
名前は、美女を反対にして「女美」優しそうに見えて酷い子ということで「優子」で、女美　優子です。

名前　五味（ごみ）　良太（りょうた）　性別　男　年齢　１５歳　身長　１８１ｃｍ

詳細
・髪の毛は濃い茶髪・少々クセッ毛・へのへのもへじのお面を被っている・善曰く顔はかっこいい
・いつも「ｗｗｗ」しか言わない・意思疎通の為、スケッチブックを持っている・一人称は俺
・善曰く、中学は荒れていた（善しかわからない）・本を持っている（何の本かは後々）
・家族は、母、父、弟の四人家族・よく喧嘩をふっかけられるのだ

が、ソノゴカレラヲミタモノハイナイ
・成績優秀でスポーツ万能という完璧超人・家庭全般は出来るけど面倒くさくてやらない

この物語で善の幼馴染。そして、平凡な主人公の代わりに万能（チート）をもらった人。実際は作る予定はぜんぜんなかったんだけど、情報通は必要だろう！みたいな感じで書いたらいつの間にかチートで定着していた。お面の方は、蒼が面倒くさくて顔の代わりにへのへのもへじを書いたのがきっかけ。
てか、五味君の性格はほとんど蒼が面白半分に作ってた。まあ、自分は特に問題はないけど。
そのためか、蒼が一番好きなキャラは五味君らしいです。自分は善君。
ちなみに、うごめもで前に蒼がキャラ投票した結果は、女美さんが一番だったらしいです。

名前　鈴蘭（すずらん）　有華（ゆか）　性別　女　年齢　１６歳　身長　１６５ｃｍ

詳細
・髪の毛は赤茶色・肩よりちょっと下くらいのストレート・校長の娘・少々？わがまま
・中学までちやほやされて来たため、高校でちやほやされる女美さんが気に食わない（同属嫌悪）
・他の男と違い、最初に何かの意思を持った視線を向けることなく、背が自分より高いのに何故か可愛い
（童顔効果）善に惚れてしまった・自分の親衛隊をもっている

まったく作る予定がなかったキャラクターです。
女美さんの裏の声、そして、それを相手に心の中で言ってるのが書きたくて四ノ葉を作ったのですが、まさか裏の声同士で争うとは思

わなかった…。
そして、善に惚れる予定は無かったんですが、まったく主人公らしく無いので、これじゃあ善の立ち位置が脇役になってしまう…！と思い、主人公によくあるフラグを立てました。
今後、この娘が出てくるかはわかりません。自分が思い描いたものとだいぶ違うものしか今までできてませんから。リクエスト（この子を出して！などの声）があった場合は出しますけどね

※今後、どんどん追加していきます。

零ノ葉　登場人物（後書き）

三話目に善だけの設定があるので、その前に追加しようと思い書きました。
登場人物より話書けって？大丈夫です。ちゃんと書きます。

話を読んでてふとここの日付を見たら更新されている…なんてこともあると思うので、時々チェックしてみてください。

それでわ。

一ノ葉　一目惚れは最悪です…　ｂｙ奴隷一号（前書き）

サブタイトルの名前の部分は毎回変わります。
その話にあった名前にしていこうと思っているので、がんばってだれか当ててみてください。

それでわ←

一ノ葉　一目惚れは最悪です…　ｂｙ奴隷一号

今日は高校の入学式。何度体験しても、このドキドキは止まらない。
バーコードの校長先生の催眠術師じゃないのっていう長いお話を聞き、僕はクラス表の所へ向かった。
――――1年2組か――――
僕はそう思い、自分のクラスへ向かう。
なんともない高揚感と期待感に教室に向かう足取りは軽い。そんなことを考えていたら、教室の扉の前についた。　ガラガラッ　と音を立てて扉を開けるとそこには…美少女がいた。
茶髪で腰まであるポニーテール。そのポニーテールを縛ってあるリボン。少々釣り目気味な目も、意思の強さをあげさせている。
そして何より…僕が一年前に一目惚れした少女だということだ。

「こんにちわ。私、女美（じょみ）　優子（ゆうこ）といいます。これから宜しくお願いしますね？」
「はっ、はい…。あっ！ぼっ、ぼく、前田（まえだ）　善（ぜん）といいます…。よろしく…」

照れていた僕は、そのとき気がつかなかった…。
女美さんが、悪魔の様な微笑みを…浮かべていることに…。

△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽

僕は、女美さんに告白した。
早い？そんなことはない。だって、一年間も思い続けていたんだ。
一年ぶり（といっても、向こうが覚えているかはわからないけど）に好きな人を見たんだ。

思いが募っているのに告白しない手はない！ということで…

「付き合ってください！！」

一秒…二秒…三秒…時間が過ぎるのが、とても遅く感じる。
僕、小さいころから本番に緊張するタイプなんだ…。覚悟を決めたのに、今とても不安です…
すると、女美さんが何かをいった

「あっ……！」
「『あ』？」
「あっはははは！はははははは！！」

突如、女美さんが笑い出した。
…えっ！なんか変な薬でも飲んだ！？それとも笑い茸！？それともそれとも…
一番最初に結論を出したのに慌て、なんでこうなったのか原因を探っていると、笑い声が止んだ。

「だっ、大丈夫！？女美さん！」
「はあ？意味わかんねぇことというなよ。俺に告白してきた馬鹿がいたから笑っただけだけ　ど？」

いや、そっちの方が意味がわからないですから！ってか…え？前からこの声が聞こえてくるけど…まさか女美さんがいってるはず…ないよな…？

「信じられないって顔してるな。まあ、そうだろ。俺の演技は完璧だかんな！」

自信満々に言う女美さん。
まさか…本当に女美さんなのか…？

「まあ、信じるも信じないもお前しだいだ。久しぶりに面白いもん見してもらった。じゃなっ！」

そういって去って行く女美さん。ふと、何かを思ったのか、こっちを向いてこういった。

「…明日から俺の奴隷な？」

その後、僕は十五分くらい唖然としていた…

△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽

告白の翌日

――――そんなはずはない。そんなはずはない。そんなはずはない。――――

僕は、現実逃避をしながら学校に来た。
昨日の夜は、寝たらきっと夢なんだと信じて寝たけど…不安だ。
きっと夢だ…！という期待をこめ、教室を開けると…

「よっ！奴隷一号クン？」

夢じゃ…なかったようです…

一ノ葉　一目惚れは最悪です…　ｂｙ奴隷一号（後書き）

このお話、実は親友の蒼（仮）と一緒に作ったものなんです。
そうはいっても、最初の部分とキャラクター以外は別々でやってます。
蒼はうごめもで書いているんですが、パソコンができません。
私はパソコンで書いているんですが、うごめもができません。
なので、キャラクター以外は別々です。
一緒の所もありますけどね。

これからも（読んでくれる方がいたら）ぜひ読んでください。

二ノ葉　ティータイムの…始まりです…♪　ｂｙ紅桜（前書き）

残酷ではないと書いてあるんですけど、血とか書いてあったら、残酷指定にしたほうがいいですか？
とりあえず今回は忠告で。

今回のお話は、残酷な表現が含まれている可能性があるので、苦手な人はブラウザバックしてください。

必要だったら残酷指定するので言ってください

それでわ←

二ノ葉　ティータイムの…始まりです…♪　ｂｙ紅桜

横には、仁王立ちした女美さん。
その目の前には違う学校の制服を着ている不良らしき人。
そして、女美さんの横にいる…かばんを二つ持っている僕。

どうしてこうなった…

僕が、女美さんの奴隷一号（認めたくないけど）になって数日がたった。
その日、僕は女美さんのかばんを持たされ、女美さんの後について下校していた。
そのまま何もなく無言で道を歩いていると…路地裏からぞろぞろと不良っぽい人が…
って、あの人達完璧不良じゃないの！？
ってか、その前に、あの路地裏って行き止まりなんだけど、どうやってそんな人数が入ったの！？
僕がそんなくだらないこと（僕にとってはすごい不思議だけど）を考えていると、女美さんと不良（もう面倒くさいからこれでいいや）のリーダーっぽい人が話していた。

「よう。嬢ちゃん。何してるんだ？」
「こんにちわ。あなた方こそ何を？」

猫被り女美さん。よく学校でみるけど、猫被りしてると妙に寒気がするんだー…。
この寒気に気がついていれば……

「あぁ？…俺らは、紅桜（べにざくら）って奴を探しているんだ。嬢ちゃん知らないか？」
「ッ！！…なんですか？その…紅桜って」
一瞬、女美さんの顔が歪んだ気がしたのは気のせいか…？
「まっ、普通知らないよな。それより嬢ちゃん。これから俺たちと遊ばないか？そんな後ろのひょろっ　こいのなんかほっといてさ～」
ひょろっこいの！？ひょろっこいのって僕のこと！？たしかに中学生のころはひょろとか男子にいわれてたけどさー…
「ごめんなさい。私そういうのにはあまり…」
「まぁまぁ。いいじゃねぇか少しくらい」
そういって女美さんの腕をとって強引につれていこうする。いくら猫被りだって、女美さんは女性だ。強引につれていっていいはずはない！それに、ちょっと青筋がたってててぼれそうだし…
「やめてあげてください！嫌がってるじゃないですか」
「あぁ？邪魔だよ！」バンッ
やめてくださいといってみたが、そのままなげだされてしまった。
ああ……。女美さんがそろそろ…
「……せんだよ……」
「なんだ？やっとOKしてくれたのか？やっぱこんなひょろ」「うっせえんだよ！」！？」ゴッ

あ〜あ…女美さんを怒らせちゃったよ。華麗に不良リーダーの顔面に吸いこまれていったこぶしは、不良リーダーさんを吹き飛ばした（といっても、少し浮いただけだけど）

「俺を誘うなんて、輪廻転生しても経験知がたりねぇよ！」

そのまま　フンッ　っといって後ろを振り返り去って行く女美さん。そのとき…僕はみたんだ…。不良リーダーが立ち上がるのを。そして、そのまま女美さんに殴りかかるのを。

「このっ…！甘く見るなぁ！！」　ゴッ

だから…女美さんが後ろから殴られるのをみていられなくて…僕が飛び出したんだ…

最後に僕が見たのは…おどろいた顔をした女美さんだった…

▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽

美女視点

「おいっ！お前！お前！おきろって！」

「そいつは気絶してるぜ。嬢ちゃん」

気絶しているのはわかる。だが、なぜ俺を庇ったのかがわからない。こんなひどいやつなのに…

「邪魔者はいなくなったし、嬢ちゃんを倒して無理やりつれていくぜ」

そういう不良に、俺は鳥肌がたった。

――――またやっちまったか――――

俺はそう思い、喧嘩をするために【アレ】を取り出した。…本当は使いたくなかったんだが…

「おっ、お前…もしかしてお前は…―『紅桜』！？」

そう。俺が【アレ】といったのは、紅桜。正式に言うと、俺は紅桜じゃない。呼ばれているのは俺の持っている木刀。俺からはふったことがないのだが、なぜか喧嘩をふられ、それをすべてかっていたらいつの間にかこんな異名がついたのだ。

この異名をといつめたら、木刀が紅いから、いままでに倒した人の血ということらしい。

【妖樹　紅桜】死人の血を吸って紅い桜の花を咲かす樹。これが元らしい。

閉話休題（それはおいといて）

「さあ、血啜時間（ティータイム）の始まりだ…！！」

▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△

俺は、あいつらを倒したあと、こいつを背負って帰り道を歩いていた。

そして…考えるのはこいつが何故庇ったのか。

こいつを背負いながら考えていると、こいつが目を覚ました。

「う……ん？ここ…は……」

「今、お前を背負って帰っているところだ。」

そうすると、あわてて俺の背中から降りようとするこいつ。

「ちょっ、降ろし…ねぇ、これってなに？」

「!?おまっ、それ返せ!」

あわてたときに見つけたのか、紅桜を手にするこいつ。俺がいつも返せというと、いつも普通に返すのに、なぜか返さないこいつ。…頭でも打ったか?

「ねぇ、女美さん…この木刀…なんていうの?」
「だから、かえ……は?」
「この木刀、名前とかないの?」
「え?いや、紅桜ってのがあるけど…どうして名前?」
「そっか…この木刀、紅桜っていうのか…いい名前だね」

そういって、紅桜を見つめるこいつ。それを聞いたと同時に、俺に安堵感が襲ってきた。
…もしかして俺は…こいつを試してたのかもな。中学の奴等みたいに裏切らないかどうかを。
ドサッ
俺は、そう思ったと同時に、背中にいるこいつをおろした

「いたっ!女美さん…いきなりおろさないでよぅ……」
「もうおきたんだからいいだろ。それと、これは俺のもんだ」

そういって、こいつから紅桜を奪い取る。…いままで忌々しかったが、これからは好きになれそうだ…
こいつのおかげっていうのがちょっと気に食わないがな。

「早く来ないと置いてくからな!善!!」
「?…わわっ!まってよ〜!」

なにかに気づきそうだった善が、慌てて女美の後をついていく。

その女美が持っている紅桜は、夕日をあびて、きれいな紅に光っていた。

二ノ葉　ティータイムの…始まりです…♪　ｂｙ紅桜（後書き）

前と違って長いって？気のせいです。

自分と蒼の間では、女美さんは最初の後、普通に善と呼んでいるのですが、
奴隷一号から善に行くにはなにかエピソードがないとな～
と考えたのがこれでした。
木刀は最初から持っていたので、それにまつわるエピソードを考えました。
スケットダンスのヒメコのエピソードも考えるヒントになりました。
ありがとうございます。

次回は、三人組の三人目が出てきます。期待しててください。

三ノ葉＋ａ　ｗｗｗ（善は意外と毒舌気味だと思う。しかも無自覚の）　ｂｙ

今回は、会話がなにげに多いです。
そして、いつもある説明風のも文字が少なく、状況が分かり辛いかもしれません。
そのときは言ってください。修正します。

それでわ←

三ノ葉＋ａ　ｗｗｗ（善は意外と毒舌気味だと思う。しかも無自覚の）　ｂｙ

四月の朝。僕は、学校に早くいくために違う道を通っていた。
だが…

「ふわぁぁ～……。眠いな～…。」
「……にゃ～ん……」
「…へ…？なにか聞こえたけど…」

なにかの声？が聞こえた。猫っぽかったけど…

「…にゃ～ん…！」

やっぱり空耳じゃなかった。えっと…方向は…

「…にゃ～ん…！」
「！こっちか…！」

僕はそういってかける。入り組んだ路地を抜け、出てきた場所は…

「学校……？」

そう、学校に出てきたのだ。こんな所なんてあるんだ～と思いながら周りを見渡す。
中々に広く、芝生もあって居心地が良さそうだった。

「にゃ～ん！」
「あっ、忘れてた…」

そうだった…。僕、猫の鳴き声を頼りに来たんだっけか。
いい場所見つけられたのは、猫のおかげだな～と思いながら猫を探す。

少し探すと見つけた。だけど、その場所が…

「何してるんだよ……」
「にゃ～ん！！」

この学校を囲んでいるコンクリートの穴に挟まっていた。
太っている猫では無いんだけど…チャレンジしてみたらはまりました。みたいな感じだ。
穴が小さいから、それくらいわかると思うんだけど…

「にゃ～ん」
「はいはい。わかったよ。今出すから前足で地面を掻いて急かすなっ、と…これでいい？」
「にゃ～ん♪」
「じゃあね。もう無謀なチャレンジはするなよー！」
「にゃ～ん！！」

そういって僕は校舎に向かう。
早く来れたのはあの猫のおかげだな。とさっきと同じ様なことを思う。
後に、ここが憩いの場となることを知らないで、僕は校舎へ歩みを進めた。

▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△

「よっ！善。早いな」

「日直なので、早く来ないといけませんから」
あの場所から校舎に向かい教室の扉についた頃、女美さんと出くわした。
まさかの女美さん。予想してなかった。ってか、女美さんってこんなに朝早かったんだ。

「…？そういえば、もう一人いないのか？」
「はい。入学した当初から来てなくて」
「それは「ｗｗｗ」（それは大変だな）」うわぁぁぁ！？」
「あっ！良太！！」

突然、女美さんの言葉をさえぎり「ｗｗｗ」といいながら僕の幼馴染、五味（ごみ）　良太（りょうた）が現れた。

「どこの学校に行ったのかと思ったよ～」
「ｗｗｗ（何気にひどいよなお前）」
「えっ？そう？」
「ｗｗｗ（そう）」
「……ってか、お前らだけで話すんじゃねえ！」

そういって倒れていた女美さんが勢いよく立ち上がり、僕の頭をつかむ。
…つかむ？なんか嫌な予感が…

「いたたたたっ！？」

やっぱり嫌な予感がしたんだー！！アイアンクローとか素で受けたの初めてだよ！！ってか、痛い！！

「俺にも説明するか…？」
「しますします。だから頭の上にあるものを外してくださいぃぃぃぃ！！」

手をどけられ、痛みから解放される僕。…痛すぎる…。そして、ドスの響いた声はやめて欲しい。
ビビルから。ほんと。

「じゃあ、まず、この変なお面の説明を。」
「了解です！えっと、このへのへのもへじのお面を被っているのは僕の幼馴染の五味　良太です。
身長は１８１ｃｍで―「そういうことをいってんじゃねぇ！」え？じゃあ、どういうことを？」
「なんでお面を被っているか。あと、なんでお前がわけわかんねぇ言葉を理解できるのか」

ああ。そんなかんたんなことか…。なんで知りたがるのか僕には不思議だけど、話したほうがいいよね。あんまり口答えするとまたアイアンクローかけられるし。

「えっと…、良太の顔を見ると、なぜかみんな気絶しちゃうんですよ。で、気絶した人は良太の顔を覚　えてないみたいで。そんなことが何回も続いてたら面倒くさいから。ということで、良太がお面をつ　け始めたんです。ちなみに、すっごいかっこいいですよ。」
「へー」

そのとき、僕は見た。女美さんの顔が　ニヤリ　と笑うのを

「じゃあ、見た奴はいないわけだな」

「はい。そうですけ…って、もしかしてみるつもりですか！？」
「ああ。見ないと女が廃るからな」
「いや、見なくても、ってああ…、もう、僕知りませんから」

忠告しましたからね！といって口をつむぐ僕。
女美さんは、良太のお面を取ろうと近づく。そして、ゆっくりお面に手をかけ…外す。
すると、女美さんが彫像の様に固まった。
後ろからみると顔はわからないんだけど、耳が真っ赤なのがわかる。
ああ…女美さんもか…
突然、女美さんが勢いよく良太にお面を被せた。被せた本人はすっごい息が荒い

「なっ…なんだあれは！！なんか…こう…ああ！！よくわかんねぇけど！！！今のはやばかった…
　気絶するかと思った」
「だから言ったのに…」
「うるせぇ！俺のチャレンジ精神が揺さぶられたんだよ！」

そういい、　フンッ！　といって教室に入って行く女美さん。
けど、なんで良太の顔を見て気絶しなかったんだろう？不思議だな～。男子ですらダメなのに。

「すごいな～。女美さんは」
「ｗｗｗ（自分を棚に上げて言うな）」
「？なにか言った？」
「ｗｗｗ（いや、何も。というか、日直当番じゃないのか？）」
「あー！！忘れてたーー！！ってか、もう一人誰かわかんない！」
「ｗｗｗ（俺ｗｗｗ）」
「いや、笑うとこじゃないから。」

そういって急いで教室に入る僕。その後を本当に笑って入る良太。
このころは…この三人であんなにたくさん、いるとは、まったく考えていなかった。

ちなみに、朝みた猫に女美さんが似ていて、ちょっと笑ってしまい、女美さんにまたアイアンクローをやられたことは秘密です。

おまけ　女美さんが来るの早い理由って…？　ｂｙ善

こんな女美さんが朝早いのには理由があるだろうと思い、僕は女美さんに聞いてみた

「ねぇ、女美さん。なんで女美さんってそんなに来るのが早いの？」
「決まってんだろ。本性を出さないためだ。眠いとよく出やすいからな」

そういって、眠気を覚まそうと必死な女美さん。なるほど。女美さんらしい。

「そういえば善。」
「はい？なんですか？」
「お前、五味の顔がかっこいいっていってたよな。なんで知ってんだ…？」
「えっ？そりゃあ、見たからに決まって――――」
「男子も気絶するって、お前自分でいってたよなぁ！！」
「えっ？そうですけど…」

てか、声に出してないのになんで女美さん知ってるんだ！？

「…なんでお前が大丈夫で、俺がダメなのかが納得いかねぇ…」

「まぁまぁ。落ち着いてください。僕も理由、知りませんし」

「いいや！納得できるまで問い詰める！」

「えぇ！？」

早く納得して欲しいんだけど…。そして、早く僕に顔を近づけるのをやめて欲しい。

女美さん、美人だから心臓が大変なことになる…！！

「ｗｗｗ『幼馴染だから。じゃ、ダメか？』」

「幼馴染だから…。ああ、わかった。納得した」

「はやっ！？納得はやっ！？」

「いいじゃねぇか。主に、お前の顔が赤くなるのを楽しむ為だけにやったからな！」

そういって、　ニシシ♪　と笑う女美さん。

美人だから絵になるけど、他の人がやったらちょっと怖いからやめてください。

「ってか、五味は意思を伝える物があるなら最初から使えよ！！」

「ｗｗｗ『すまん。完璧忘れてたｗｗｗ』」

「本音！本音出てるから！良太！！」

そんなこんなで三人の今日の朝は終わった。

「ｗｗｗ『てか、日直は？』」

「あっ…忘れてた…」

三ノ葉＋ａ　ｗｗｗ（善は意外と毒舌気味だと思う。しかも無自覚の）　ｂｙ

誤字・脱字がある場合は、報告してくれると助かります。

四ノ葉　鈴蘭さまの様子が可笑しいわ…！？　ｂｙ鈴蘭親衛隊（前書き）

今回は、三つの話で一話にしようと思っていたものの二つ目です。
三つ目は、いつかやろうと思います。きっと…
あと、今回は「善が主人公なんだぞ！」ということを見せ付けるために、フラグを立ててみました。
「不憫系主人公にフラグはいらないっ！」という方はブラウザバックをお勧めします。

それでわ←

四ノ葉　鈴蘭さまの様子が可笑しいわ…！？　ｂｙ鈴蘭親衛隊

「ごめんなさい！！」

今、僕が何をしてるかって？きまってるじゃないか。

謝っているんだ！

「ほぅ…それで？何か言い訳はあるか…？」

「ありません！本当にすいません！こけた僕がまったくもって悪かったです」

ただいまの時間は、昼休み。

女美さんも、クラスの人が購買いったり食堂いったりしたため、本性全開です！

それはさておき今の僕の状況説明。

僕は、猫被り時の女美さんから、

「私、体力が無くて、あまり走れないの。できれば、自分で行きたいのですけど…お願いできます？

（俺はか弱い少女なんだから、善、お前が行って来い。…いけるな…？）」

そんな裏の言葉が聞こえるようになってきた僕はそろそろダメだと思う。

入学して一ヶ月もたたないのにな…

現実逃避しながら購買に向かおうとしていた僕に、女美さんの声がかかる

「間違っても、全部なんて買ってこないでくださいね～（全種類買って来いよ！）」

ああ～…裏の言葉なんて聞きたくなかった。

ってか…あれ？お金は…あとで女美さんに聞けばいいや。

そんな僕に、何も知らない人達の嫉妬の視線が突き刺さる。きっと、女美さんと話せていいなと思っているんだろう。

みんな～！騙されてるよ～！女美さんの本性は真逆なんだ～！！

そう、心の中で叫んでも届かないのはわかっている…けど、叫ばずにはいられないだろう！

いつの間にか、現実逃避をしながら、僕は購買へ急いだ。

で、買ってきました。

最後の一個の焼きそばパンを巡って先輩と戦ったのは余計なので言いません。

だが！その途中…こけました…。

別に、僕がトロイとか運動神経無いとか、そういうのじゃないからね！！

運動神経は人並みにあると思うし…

またまた話がそれちゃったけど、折角買ってきたのにこけて全部ぶちまけてダメになりました…

袋に入ってるだろ？って思う人はまだ甘い！
袋に入っていても、踏まれたら意味無いじゃないか…

で、ただいま女美さんに怒られているわけです。

今は周りに人がいないので、裏の声は無しです。
…よかった…。あれ、妙に鳥肌たって嫌だったんだよね～。

またまた現実逃避をしていると、女子軍団が入ってきた。
そして、女美さんは鋭い目つきをすると、猫被り状態になった。

ここで、問題！
Q何故、女美さんの目つきが鋭くなったのでしょう？
A女子軍団が、女美さんを虐めている？人達だからです！
正解！って、自問自答やってる場合じゃないっ！

早く逃げないと巻き込まれる…！だが、一足遅く…

「あら、こんにちわ猫さん」
「こんにちわ。鈴蘭さん」

ニッコリ微笑む女美さんと鈴蘭さん。ってか、女美さんを猫って！
たしかに、ちょっと猫っぽいけどさ…。
…はっ！冷静に状況を見ていたら逃げ遅れた！あぁ…どうしよう…
実は、裏の声って女美さん限定じゃないんだよね…

「もう、お食事はすませましたの？（食べなくても生きれるから食

事なんて必要ないでしょう？）」
「いえ。これからです（安心して食事も出来ねぇから失せろ！）」
「そうですか。じゃあ、ご一緒させてもらってもいいですか？
（どんな粗末なものを食べているか、私が見て差し上げますわ）」
「はい。喜んで（うぜぇ…）」

…黒い…僕、ここにいたくないんだけど…女美さんが僕の手首を離してくれないよ…（泣）
僕、こんな　ドロッドロ　した空間にいたく無いんだけど…

「あら？そちらの方は？（あなたが下僕を持つなんて…白々しい！）」
「前田　善さんといって、私にとっても親切にしてくださるの
（お前の方より俺の方が人望が上なのは明らかなんだからいいかげん付きまとうな！）」
「そうですか。（こんなあんたにも人望なんてものがあったのね）」

相手に裏の声は聞こえないはずなのに、裏だけでも会話しているように聞こえる…
なんとも女性は恐ろしい…！！

「こんにちわ。隣のクラスだから知っていると思いますが、鈴蘭（すずらん）有華（ゆか）といいます。よろしくお願いしますね？（はっ！庶民が）」

この人、今鼻で笑ったよ！しかも、裏の声が「庶民が」の一言って…（涙目）
僕は、涙目になりながら自己紹介をした。
涙目なのはしかないじゃん！怖いんだもん！！女性怖い！恐怖症になりそう…。

「え、えっと…前田　善です…。よろしく」ペコリッ　↑お辞儀
ポンッ！！
…？今さっき変な擬音が聞こえたんだけど…
鈴蘭さんは耳まで顔を真っ赤ににして後ろを向いてるし、女美さんは俯いて笑いを堪えてるし…

えっ！？僕の自己紹介、なんか可笑しかった！？
そういって女美さんに目線で問いかけるが、女美さんの笑いを増幅させるだけだった。

すると、鈴蘭さんがいきなりこっちに振り向いた。…まだちょっと顔が赤いけど…
それに反応した女美さんは、いっぱつで猫被りの顔を作って前を向いた。
すごいな…。僕なんかびっくりして　ビクッ　とかいう擬音が付きそうな位驚いちゃったよ。

「きょっ、今日は用事を思い出したので失礼しますわ！！」

あれ？裏の声が聞こえない…なんでだろう？

「はい。またいらしてくださいね（もう来んな！！）」
「そっ、それではまた会いましょうね。善さん」

女美さんの皮肉っぽい言葉にも反応しなかったし…本当にどうしたんだろう？
僕が首をかしげていると、女美さんがもう限界というように吹きだした。
そして、そのまま湧き出る水のように絶え間なく笑っていた。

「どうしたの？女美さん？」
「いや、あいつが面白くて…ふふふっ…」
どうやら、笑いを必死に堪えているようだ。
「あいつ」というのは鈴蘭さんのことだと思うし…なにが可笑しいんだろう？
「しかも…あからさまに善さんって…」
「？僕の名前を呼ぶことが、そんなに可笑しいの？」
「可笑しいってお前…普通わか……お前…わからないのか？」
急に鋭い目つきになる女美さんにびっくりしながらも、僕は普通に答えた。
「わからない」
普通そうでしょう。相手の気持ちをわかったらそれは悟りを開けるよ。
…まぁ、あのあからさまな悪意は除いて。
「…今だけ同情するよ…。こいつは分が悪すぎる…」
「？」
僕は、よくわからないため、そのまま女美さんの言葉をスルーした。
「ってか、昼飯は…？」
「あっ……」
最近、僕は物忘れがひどくなってきたかもしれません。

四ノ葉　鈴蘭さまの様子が可笑しいわ…！？　ｂｙ鈴蘭親衛隊（後書き）

善がなぜ悪意を理解できるのか。それは登場人物に載せるので気になる人は見てください。
ちなみに、善が「！」を多用しているのは、自分のテンションがおかしくなっているからです。
あと、女子軍団は廊下待機なので会話には関わっていません。
誤字・脱字があったら、報告してくださるとうれしいです。

五ノ葉　魔窟って知ってか？職員室のことなんだけどよ――――　ｂｙ噂好きの男

今回はちょっと短めかも知れません。
ご了承ください。
それでわ←

五ノ葉　魔窟って知ってか？職員室のことなんだけどよ―――　ｂｙ噂好きの男

昼休み

ピン・ポン・パン・ポン

『あ～ああ～あ～マイクテストマイクテスト……よしっ』

突如、放送のアナウンスがなった。

『あ～、えっと…一年二組の五味　良太、女美　優子、前田、善は、職員室に来ること。以上』

ピン・ポン・パン・ポン

そういって、終わった放送。

ってか、なんの呼び出し？僕、特に何もしてないと思うけど…

「善さん。行きましょう？（早くいくぞ！）」

「あっ、うん。ちょっと待って！」

「大丈夫です。待ってますよ（早くしないと置いてくぞ！）」

そういって、表は優しげ（クラスメイトがいるため、猫被り中）だが、裏では圧力をかけてくる女美さん。……少々怖いです…

「良太！早くいくよ？」

そういって、　スクッ　と立つ良太。だけど…

「早くいきましょう？」
「待って！まだ良太寝てる…」
「え！？寝てらしたの！？（寝てたのか！？）」
裏と同じ意味なら思わなくてもいいと思うんだけど…
とりあえず、僕がやるのは…

「良太！お～き～て～！！」　ユッサ　ユッサ
「ｗｗｗ（俺は…お…きて…い…Ｚｚｚ　Ｚｚｚ）」
「りょ～う～た～！！」
「起きました？（起きたか？）」
「ううん…起きない…」

う～ん…。と悩む女美さん。というか、僕としては女美さんの裏と表の二十音声をやめて欲しい…
すると、何かを閃いたのか僕に近づいてくる。

小声「なぁ、こういうのはどうだ？」
小声「どうだ。って言われても、まだ案を聞いてないし…」
小声「うるせぇ！こういうのは、最初はこう入るのが筋ってもんなんだよ！」

小声で怒鳴ると言う器用なことをした女美さん。
筋っていわれてもな…
というより、早く離れて欲しい…。周りからの嫉妬の視線が痛すぎる…

小声「五味って、仮面で見えないだろ？」
小声「うん。見えないね。…お面だけど…」
小声「何か言ったか？」

小声「ううん。なんでもない。それより、続けて？」
僕がそういい、女美さんが説明を再開した。
小声「五味を眠らしたまま俺らが引っ張ればいいんじゃないか？」
小声「あっ！確かにそうだね。良太ならお面で顔が見えないし…」
小声「ということで、考える前に実行だ！」

そういって、実行するために僕の傍を離れる女美さん。
だけど…嫉妬の視線が女美さんがいなくなってさらに増えました。
…誰か代わって…

「五味さん？起きてます？」
「へっ？起きてな……いぐぅ！？」
小声「もう始まってんだぞ！？」
小声「すっ、すいません…」

僕が状況が分からず普通に答えようとして…女美さんに足を踏まれました…
痛い…まだ　ジンジン　する…。なんか、抉ってるみたい

小声「はい！善セリフ！」
小声「ふぇ！？えっ、う、うん。えっと…」
「あっ、良太？起きた…」
小声「下手だぞ！善！」
小声「うぅ…。僕、こういうの苦手なんです…！」

僕は、お芝居とか演技とか、そういうの苦手なんだって…！！
そういうのはお母さんとお兄ちゃんにまかせればいいんだよっ！！

小声「俺がいうから、お前は最小限の言葉で俺に合わせろ！」
小声「りょっ、了解…」
「あっ、五味さん起きました？」
「おっ、起きたみたい…」
「ｗｗｗ（Ｚｚｚ…鈍感、毒舌、俊足…前田家の次男だ…Ｚｚｚ）」
小声「ナイス！五味！でも、なんて言ってんだ？
小声「鈍感、毒舌、俊足…前田家の次男だ…って僕のこと！？」

まさかの僕のこと！？
ひとつも同意できることが無いんだけど…

小声「…納得…」
小声「なにか言った？」
小声「いや、何も」

何言ったんだろう？何か言った気がするんだけど…

「五味さん？行きましょう」
「良太！行くよ？」

そういって、僕らは良太の両腕を片方ずつ引っ張る。

そんな茶番があり、やっとついた…

職員室（魔窟）
そう呼ばれている。その所以は、
この学校の先生が個性的過ぎるためだ。

ある者は頭に角？が生え、またある者は頭が玉葱？。またある者はやる気がない。など、問題がある先生ばかりなのだ。

しかし、そんな先生達は、教頭に忠誠みたいな者を誓っているらしく、こちらが正しければ見方になってくれるが、ほとんどは教頭先生の見方だ（まぁ、何かやらかす僕ら生徒の方が一般的に悪いけど）

そんなこんなで、ここは職員室（魔窟）と呼ばれている。

そして、僕ら三人…一人はお面を被った睡眠中の男子。一人は猫被り中の美女。一人はそれらの暴走を抑えるストッパー。

そんな凸凹な三人が職員室に入ろうとしていた…

「あっ、別に何かあるわけじゃないですよ？」

「誰に言ってんだ？」

五ノ葉　魔窟って知ってか？職員室のことなんだけどよ――――　ｂｙ噂好きの男

誤字・脱字があったら報告願います。

六ノ葉　…俺さ…職務放棄していい…？　ｂｙ一年二組主任（前書き）

前回の続きです。
最後辺りはシリアスが入っています。
「暗いのきらい！！」って方はクイックターンで戻ってください。
それでわ←

六ノ葉　…俺さ…職務放棄していい…？　ｂｙ一年二組主任

ガラガラッ

僕らは、職員室の扉を開けた。そこは…

普通だった

「案外普通だね」

「普通じゃないと困りますから…（魔窟とか言われてるのにな）」

「ｗｗｗ（Ｚｚｚ…Ｚｚｚ…）」

女美さん…。表と裏でいってること真逆だから…

ってか、まだ寝てたの！？良太！

「とりあえず行きましょうか。そのあら…「荒等木先生」そう、荒等木先生の所へ」

女美さん…。いくら興味がないからって、担任の先生の名前くらい覚えとこうよ…

僕もちょっとうろ覚えだったけど…

そう思いながら歩いていると…

「おい。こっちだ」

美声が聞こえた。

いや、ちゃんとした美声なのか分からないけど、お兄ちゃんと同じ系統だとは思う。

「何やってたんだ？遅いぞ。」

ここで紹介。
この美声？の人は荒等木先生。通称、角の人だ。
頭から竜のような角が耳の上から生えている謎の先生。だけど、めんどくさがりや。
けど、やるときはやる先生らしく、仕事は優秀らしい。仕事は…
めんどうくさくて、態度はダメダメなため、問題顧問らしい。
けど、顔はイケメンでモテるらしい。…まさしくお兄ちゃんタイプだ…

そんな中、話は続く。

「すいません。ちょっと混んでたもので…」
「ふ～ん。そうか。…まっ、いっか。というか、話す前にそのお面、起こしとけよ」

気づいていたが、途中で言うのを止めた様な違和感。そんな違和感を僕は感じた。
っていうか、良太が寝てるの気づいてたの！？…すごい…

小声「良太！おきてよ！！」
「ｗｗｗ（Ｚｚｚ…あと五分…と１２２８分…Ｚｚｚ）」
小声「もう次の日だから！！」

長いよ！！どれだけ眠いんだよ！！…もうツッコミ疲れた…
僕は、先生に向かって首を振った。

「…まぁいいだろう。お前からお面に話しとけよ。」
「了解しました…」
そういって先生は話し始める。…一瞬、僕に同情の視線が向いた気がするけど…気のせいかな？
「え～っと、お前ら、部活に入ってないだろ。」
「はい。」
「入ってないです。」
肯定する僕ら。ちなみに、良太は省きました。
「単刀直入に言う。お前ら部活入れ。」
「嫌です♪」
「えっと、ちょっと…無理です…」
そう僕らが言うと、予想していました。けど、一応言ったけどダメでした。みたいな感じにため息をはいた。
「…分かってたけどさ…。で、理由は？これ聞かないと帰れないんだよ。」
「私は、家が道場なのでそれで手一杯ですし、やりたくないし。」
女美さん！本音！本音！本音漏れてるってば！
「で、そこの苦労性の少年は？」
「あっ、僕は親が共働きで兄と妹もほとんど家にいないので家の用事…えっと、家事とかやらなければ　いけないので…」
「お前…苦労してんだな…」
「…すげぇ…けど、俺はあの立場にはなりたくない…」

僕の理由を言ったとたん、二人が僕を同情の視線で見てきた。
ってか、女美さん！なりたくないってどういうことですか！家事だって意外と楽しいんですよ。

「お面は…いいか。じゃあ、帰ってよし。あっ、女美は残れ。話がある。」
「何故ですか？（いいから早く返せ！）」

女美さんの裏の声が聞こえてくる…。たびたび本音もれてたから、裏の声聞こえなかったのかな？
まぁ、いいかな。

「じゃあ、女美さん。先帰ってるね」
「はい。（別に報告しなくてもいいんじゃね？）」

たしかに報告しなくてもよかった気がするけど、いわなきゃ怒られそうだったから…
そうして、僕らは職員室を後にした。

「ｗｗｗ（はっ！ここは…どこだ…？知らない天井だ…）」
「そこ床だから。ってか、今起きたんだ…」

▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△
美女視点

俺は、荒…なんとか先生につれられて、不思議な部屋に入った。

「なんですか？この部屋は」
「そう警戒するな。大丈夫。ここには何もない。」

そういわれても、信じられるわけがねぇだろ！

「まぁ、別に何かをするわけじゃねぇから、安心しろ」

「で、ご用件は何ですか？」

こっちは早く授業を終わらせたいんだ。早くしろ。

「お前には、忠告をしに来た」

「…忠告…ですか？」

「ああ。これでも、俺の本業は占い師だからな。」

占いとか、信じないんだけどな…

「俺の占いは、大きな変化を読み取れる予知能力だ。」

それがどうかしたのか…？

「普通は相手に特定して視るんだが…特定しなくても視れる大きな予知があった。」

「それが…私に関係してくると…？」

「ああ。そうだ。」

そういって、先生は後ろを向いた。

「卒業するまでの三年間…それが、お前にとっての通過点（ターニングポイント）だ」

「ターニングポイント…？」

「そうだ。それを逃すと…お前の心は闇の中だ」

「ッ！！…」

闇の中…三年間…俺には意味が分かる。わかりたくないほど…わかる…

「その三年間、よく目を凝らして「視る」んだな。」

そういって、先生は最初に入った扉から出て行った。

「通過点（ターニングポイント）」

その呟きは、闇の中に消えていった…

六ノ葉　…俺さ…職務放棄していい…？　ｂｙ一年二組主任（後書き）

新キャラ登場です。
蒼が提案したキャラで、一回は没にしたんですけど、性格を変えて出しました。
ちなみに、占い師とかぜんぜん設定にありませんでした。
詳細は、後日登場人物で…

誤字・脱字など、報告してくれると助かります。

七ノ葉　女神の優子様と友達…だとぉ？（怒）　ｂｙ剣道場の練習生＆女美フ

昨日が眠たくて更新ができなかったので…嘘ですごめんなさい。
完璧にサボってました。
以後、気をつけます。

それでわ←

七ノ葉　女神の優子様と友達…だとぉ？（怒）　ｂｙ剣道場の練習生&女美フ

放課後

僕は、いつもの女美さんと僕に加え、良太も加わり、三人で帰っていた。

すると女美さんが

「俺んちの道場よるか？」

というので、女美さんの家の道場によることにした。

そして今…

「…でかい……」

「ｗｗｗ（でかすぎる…）」

女美さんの家の道場に、僕らは来ていた。

…ってか、でかい！でかすぎるよ！！もうちょっと小さくてもいいと思うよ！

「早く中入れ」

「あっ、そうだね。お邪魔しま～す」

「ｗｗｗ（お邪魔します。）」

そういって、僕らは道場へ入っていった。

「？ねぇ、玄関は？」

「ああ。ここ、家の前にあるからここを通らないと入れないんだ」

裏口も、一応あるけどな。そういう女美さん。
普通、玄関と道場の入り口って、違うことが多いと思うけど…

「やぁ！！」

ふいに、そんな声が聞こえて、僕は振り返った。
そこには、柔道着を着て立っている女の子と、仰向けの男の子がいた。

なんであんな格好なんだろうと思っていたら、女美さんが説明してくれた。

「なんであんな格好なんだろう？って思うだろ？」
「うん。」
「俺んち、剣道と柔道を一緒に教えてるんだ。ほら、前の看板にも書いてあるだろ？」

そういった女美さんの指す方向を見る。
すると、そこには「女美剣道場　柔道場」と書いてあった。

「じゃあ、あの柔道着を着ている子は、柔道を習ってるんだ」

だから仰向けの男の子がいたのかと納得した。

「じゃ、行くか。剣道場はあっちだからな」

そういって、さっさと前に進んでいく女美さん。
ってか、剣道場と柔道場が分かれてたら、もっとお金かかる気がするけど…

そんなことを思いながら、僕は柔道場を後にした…

△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽△

「やぁ！！」「はぁ！！」「てやぁぁ！！」

剣道場に移ると、練習生がたくさんいた。でも、特に目立っているのが…

「ここは、足に力をいれてね」

「はい！！先生！」

あの、先生と呼ばれる人だった。

「ただいま戻りました。お父様（戻ったぞ。親父）」

「お帰り。優子」

ってか、先生って女美さんのお父さんだったの！？女美さんのお父さんなだけある…

いや、女美剣道場って書いてあるから、親が先生なのは普通だけどね。

「おや？後ろの二人は、優子の友達かい？」

「はい。そうですわ。お父様」

友達かい？で、みんなが一斉に視線を　チラッ　とだけ向けたんだけど、女美さんがはい。と肯定すると、一気に視線が妬みとか恨めしい視線で見てきたんだけど…

「こんにちわ。僕は優子の父親の女美（じょみ）　表図（ひょうと）だ。よろしく」

「あっ、僕は前田（まえだ）　善（ぜん）といいます。宜しくお願いします」
「ｗｗｗ『俺は五味（ごみ）　良太（りょうた）宜しく』」

三者三様の挨拶を交わす僕たち。
すると、表図さんの目が、少しだけ細められた。一瞬だけだったけど。

「知ってるよ。噂の善君と良太君だろ？」
「知ってるんですか？…ってか、噂って…」
「ｗｗｗ『大丈夫。俺が噂の元だ』」

そう、僕に見えないようにスケッチブックを表図さんに見せる良太。
すると、表図さんが少し噴出した。（女美さんは下を向いて肩を震わせている）

「何書いたの？」
「ｗｗｗ（秘密）」
「みしてくれたっていいじゃないかー！」
「ｗｗｗ（嫌だ。だって怒るから。それに…）」

そういって、楽しげな笑みを浮かべ、逃げ出す良太。
僕もがんばれば追いつけるけど、ここで走ったら怒られそうだから止めとく。

女美が、我慢の限界。とでも言うようにたぶん玄関がある方向に駆けていった。
表図は、優しそうな目で見つめている。

ふと、視線を下に向けると、スケッチブックの切れ端があった。
そこには文字が書いてあり、表図はそれを目にして、笑みを深めた。

『それに、久しぶりに遊びたかったから。』

七ノ葉　女神の優子様と友達…だとぉ？（怒）　ｂｙ剣道場の練習生＆女美フ

表図さんの名前、実際は出すつもりはなかった。
というか、名前すら決まっていなかった。
逆に、お母さんの方をいっぱい出そうと思っていたのに…

伏線、張って見ました。分かるでしょうか？（分かったら意味ないけど）
後、お宅訪問シリーズをもう一回やって五月に入ります。
四月でお宅訪問って…

誤字・脱字など報告してくれたら助かります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1439ba/

美女に勝てない善人

2012年1月14日18時37分発行